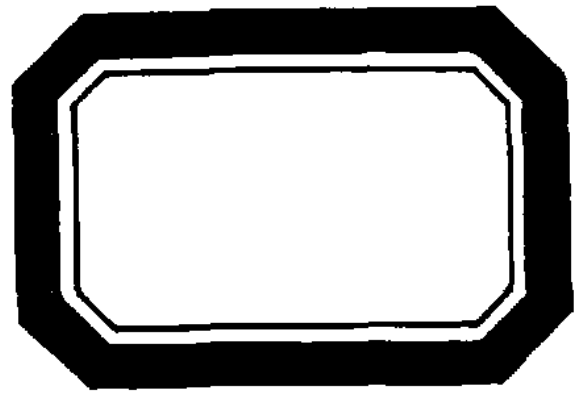


人情武士道

山本周五郎

新潮文庫





にん じよう ぶ し
人 情 武 士 道

新潮文庫

や - 2 - 54



平成元年十二月十日 印刷
平成元年十二月二十日 発行

著 者 山^{やま}本^{もと}周^{しゅう}五^ご郎^{ろう}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五二一

編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

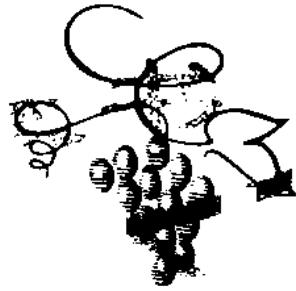
© Tōru Shimizu 1989 Printed in Japan

ISBN4-10-113455-3 C0193

文 庫

人 情 武 士 道

山本周五郎著



新 潮 社 販

4365

目次

曾我平九郎	七
癩癩料二十四万石	三九
竹槍念仏	六五
風車	九三
驕れる千鶴	一二一
武道用心記	一五五
しぐれ傘	一九三
竜と虎	二三一
大将首	二四九

人情武士道……………二七七

猿耳……………三〇七

家常茶飯……………三三五

解説 木村久邇典

人情武士道

曾^そ
我^が
平^へ
九^く
郎^{ろう}

一

信長は突然顔をあげて、

「氣に入ったか」

と訊いた。

余りにふいの事で、曾我平九郎にはその言葉が分らなかったから、碁石を握っている手をそのまま下して、

「は——？」

と主君の眼を見上げた。

信長は、いま襖の彼方へ去って行った侍女若菜の方へ一瞥をくれながら、

「若菜よ」

と云う。平九郎はと赧くなった。

「何を、何を仰せられます」

「ははは赧うなったの」

信長は面白そうに、

「我慢の平九と云えば清洲きつて武骨と噂に定まった男だがやはり血は温う流れるとみえる。どうだ美しかろうか」

「何がでござりますか」

平九郎の返事は意外だった。

「何が——？」

信長ちよつと鼻白んだ。

「若菜よ、若菜の姿美しゅうはないか」

「さ、どうでござりましょう」

平九郎は静かに盤面へ石を置いた。

「ほほう大分構えるな、彼女^{あれ}もしかるべき者の娘であつたが今は孤児^{みなしこ}、よき男あらば縁づけ
くれようと存じているが、どうだ平九、嫁にとる気はないか」

「ござりませぬ」

にべもない答えた。

「私、生来女子^{おなこ}が嫌い^{きら}いでござります」

「隠すな」

「殿こそ、お戯れ^{たわむ}を」

「なに戯れ？」

信長の唇^{くちびる}がぶるぶると痙攣^{ひきつ}つた。

「平九郎、その方上総介^{かすさのすけ}を盲目^{めくら}にする気か」

「は？」

「先刻より三度まで、若菜が茶を運んでくる毎に、その方愚な手を打っていること、この信長が知らぬと思うか、うつけ者め」

信長は指を以て盤面を指した。

「ここ、ここ、ここ！ この三石は何だ」

平九郎はつと手を下した。

「多くある家臣の中でこの男と思うたればこそ碁の相手にもしばしば呼んで、若菜に茶を汲ませたものを、その心尽しを察しもせんで戯れとはどの口で云う。上総介信長が取持の役まで買っているに白をきって、生来女子を好まぬなどどこまで欺き澄ます気だ。見損つていた、退れ！ 左様な心ねじけた奴家臣に持つことならぬ、唯今限り勘当だ」

「あ、御勘当とは？」

驚いてすり寄る平九郎。信長は、

「ええ眼触りだ！」

甲高に叫ぶと、

「殿、し、暫く」

裾に縫ろうとする手を振払って、足音も荒く奥へ去ってしまった。日頃の一徹の気性を知っているから、平九郎もどうにもならぬと覺った。力無く座を立つと溜へ寄り、支配頭池田信輝に取なしを頼んで城を退った。

平九郎は俊斎の子、年は二十六歳、御使番で槍の達者だった。四年まえに父俊斎が卒して

からは下僕六助と二人住い、母はとくに亡^なかつた。俊斎が先代信秀の出頭人であつたことから、信長も平九郎を疎^{うと}からず思い、徒士組にいたのを馬廻りに取立て、幾許もなく使番としてめをかけていたのである。その気持は平九郎にも身に浸^しみて有難^{ありがた}かつたから、人一倍武芸に出精^{しゅつせい}して折あらばこの君の馬前に死のうと誓^{ちか}つていた。

五十日程前のことである。

「遠駈^{とあがけ}の供をせよ」

という命が不意に平九郎を驚かせた。蒼惶^{そうこう}としてまかり出ると、供は自分ともう一人、それも輕装した小女房である。それが若菜であつた。審^{いぶか}り顔の平九郎に、

「此女は少々騎^のるぞ、負くるな平九」

そう云つて信長は悪戯^{いたづら}そうに笑つた。

小牧山まで二刻^{ふたとき}、信長を先頭に平九郎、若菜の二騎、轡^{くつわ}を並べて傍乗を勤めた。併し手綱^{しかたづな}捌^{さば}き、煽^{あお}り、抑え、駈けいずれを見ても若菜の馬術は非凡なもので、相駈けの平九郎を追越すまいと気を配る女らしい優しさと余裕さえ充分にもつていた。

「併し、何故殿はこんな供をさせるのであろうか」

平九郎はそれが分らなかつた。

二

それがきつかけで、それから平九郎はしばしばその遠駈に召された。主君の寵^{ちやう}を受くるこ

とは望外の面目であるが、武弁一徹の平九郎にはそうした晴がましさが辛^{つら}かった。しかもそうした時必ず若菜が一緒であることは、何かにつけて心が乱れる、見まいとすればする程、却^{かえ}って姿が眼について遠駈の後のぼっと上氣した頬^ほ、風に吹送られてふっと鼻をかすめる匂^{にお}やかな女の香、豊かに肉の乗った体つきなどが日を経^ふるにしたがつて忘れぬものとなつていった。

ところが五六日前のことである。城中の溜に集つていた若武者達^{たち}の噂話を、聞くともなく平九郎が耳にした。

「若菜とか申す侍女な」

「うん」

「殊^{こと}の外のお気に入りに見えるが、最早お手がついたのではあるまいか」

平九郎の血が逆流するかと思われた。

「さあ御潔癖ゆえそこまでは知れぬが、ともかく一向^{ひたぶる}の御執心だな、お傍御用^{そばごよう}は彼の女が手一つにお仕え申しているらしい」

平九郎はその後を聞くに堪えなくなつてその場を外した。

「そうか、殿御執心の女だったか」

そう呟^{つぶや}くと共に、その日まで心竊^{ひそ}かに抱いていた自分の恋心を、嘲^{あざけ}るように苦笑をもらした。

「御執着の侍女に懸想^{けんそう}するなどと、自分は何という分際を知らぬ男だ。諦^{あきら}めよう」
そう決心した。

こうしたゆくたてがあればこそ、今日信長の言葉を素直に受取ることができなかつたのである。

「氣に入つたか」

と云われた時既に、心を見透かされて度を失つていたのだ。殿御執心と知つていればこそ嫁にとらぬかと云われても、辞退する外はなかつたのである。その心が信長に通ぜず、徒に主君を盲目にしたと思われたのでは、さすがに平九郎も悲しかった。

「や、最早御退下にござりますか」

平九郎の早い帰宅をみて、下僕は審り顔に出迎えた。

「お顔の色が勝れませぬがお加減でも悪うござりますか」

「うん、頭が重うて」

「お薬湯など煎じまするか」

「構わんでよい」

平九郎は何をする元氣もなく居間へ入るとそのまま、刀を脱つたなりそこへ坐りこんでしまつた。

翌る朝早く、隣邸に住んでいる木下藤吉郎が訪ねてきた。藤吉郎は仕官して五年に満たぬ新参であつたが、智略拔群、数度の功によつて普請奉行の役についていたし、役禄五百貫を領した隆々たる出世振りに世を驚かしていた。したがつて柴田勝家、佐久間信盛、坂井右近ら、清洲譜代の老臣どもは、人もなげな昇進ぶりを苦々しく思つて、

「野猿^{のざる}めが、身の程も知らんで」

と疎んじていたが、平九郎は藤吉郎の智謀と、功に誇らぬ卒直さが好きで、はやくから親しいつきあいをしていた。

「御勘気を蒙^{こうむ}ったそうにござりますな」

座に就くとすぐに、

「お小姓衆から容子^{ようす}を聞いて取敢^{とりあ}えずお伺^{つかまつ}い仕^{つかまつ}ったが、何を失策なされました」と藤吉郎が訊ねた。

「さあ——」

平九郎は苦笑した。話すべき事であろうか、主君御執心の女、それと知つたればこそ御意に逆ろうた自分の気持、それは迂闊^{うかつ}に語るべきことではない、知ってもらえたとすれば信長公自身に知ってもらふべきで、他の人の耳に入れて良い事ではない。

「お話し申上げたいが、申せば身の恥、どうぞお訊ねくださるな」

「それでは伺^{うか}いますまい」

藤吉郎は頷^{うなず}いて、

「日頃御出頭のこと故^{ゆゑ}、御勘当もすぐにゆるむことでござりましょう。折があつたら憚^{はばか}りながら私よりもお口添仕ります」

「何分ともに」

「ま暫くは骨休め、御心労なさらずに静養でもして——」

心安く云つて藤吉郎は辞し去った。

木下が取なしてくれたら、あるいは早くお詫^わびが協^かうかも知れぬ、と心丈夫に思っている
と二三日して、支配頭池田信輝が馬をとばしてやってきた。

「どうぞござりました」

何より先に訊くと、

「だめじゃ、きつい御不興でう」

「は」

「平九郎の儀なれば助言無用、そう仰せられるきりお取上げにならぬ」

「では、どうしても御勘当は許されませぬか」

「今の御気色ではのう」

平九郎は胸を塞^{ふさ}がれるような思いだった。

「併し何とかその内に考えようから、決して落胆せぬようにな」

「は！」

「お許^{もと}にも思案があつたら申出してくれ」

そう云つて信輝は帰つて行つた。

三

七日めの夜であつた。